□小説の冒頭

□『雪国』　川端康成

□国境の長いトンネルを抜けるとそこは雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

□『草枕』　夏目漱石

□山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

□『山椒魚』　井伏鱒二

山椒魚は悲しんだ。彼は彼の棲家である岩屋から外に出ようとしてみたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかったのである。

□『夜明け前』　島崎藤村

□木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾を巡る谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。

締め切り　一二月二〇日